

杜子春

芥川龍之介

一

ある春の日暮れです。

唐の都洛陽らくやうの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春とししゅんといつて、元は金持ちの息子むすこでしたが、今は財産を使いつくして、その日の暮らしにも困るくらい、哀れな身分あわれな身分になっているのです。

なにしろその頃洛陽らくやうといえ、天下に並ぶものがない、繁盛はんじやうを極めた都ですから、往来にはまだしっきりなく、人や車が通っていました。門いっぱいかどに当たっている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗しゃの帽子ぼうしや、トルコの女の金の耳輪みみわや、白馬はくばに飾かざった色糸いろいとの手綱たづなが、絶えず流れていく様子は、まるで絵のような美しさです。

しかし杜子春とししゅんはあいかわらず、門の壁かべに身をもたせて、ぼんやり空ばかり眺ながめていました。空には、もう細い月が、うらうらとなびいた霞かすみの中に、まるで爪つめの痕あとかと思うほど、かすかに白く浮うかんでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、そのうえもうどこへ行っても、泊とめてくれる所はなさそうだし

——こんな思いをして生きていくくらいなら、いっそ川へでも身を投げて、死んでしまったほうがましかもしれない。」

杜子春とししゅんは一人きりから、こんなとりとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然とつぜん彼のかれの前へ足を止めた老人らうじんがあります。それが夕日の光をあびて、大きな影かげを門へ落とすと、じっと杜子春とししゅんの顔を見ながら、

「おまえは何を考えているのだ。」と、横柄おうへいに声をかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです。」

老人らうじんの尋ね方が急たすでしたから、杜子春とししゅんはさすがに目を伏ふせて、思わず正直な答えをしました。「そうか。それはかわいそうだな。」

老人はしばらくなにごとか考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「では俺われがいいことを一つ教えてやろう。今この夕日ゆじの中に立って、おまえの影かげが地に映うつったら、その頭あたまにあたるところを夜中に掘ほってみるがいい。きっと車くるまにいったいの黄金おうごんが埋うまっているはずだから。」

「本当ですか。」

杜子春とししゅんは驚おどろいて、伏ふせていた目をあげました。ところが更に不思議ふしぎなことには、あの老人はどこへ行ったか、もう辺りにはそれらしい、影かげも形かたちも見あたりません。そのかわり空の月の色は前よりもなお白しろくなって、休やすまない往来の人通りの上には、もう気の早いコウモリが二、三匹さんびきひらひら舞まっていました。

3 【唐】中国の王朝の名前。
3 【洛陽】中国の都市の名前。
実際の唐の都は長安で、洛陽は副都であった。
7 「しっきりなく」はっきりなく。

杜子春は一日のうちに、洛陽の都でもただ一人という大金持ちになりました。あの老人の言葉どおり、夕日に影を映してみても、その頭にあたるどころを、夜中にそっと掘ってみたら、大きな車にも余るくらい、黄金が一山出てきたのです。

大金持ちになった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けないくらい、ぜいたくな暮らしを始めました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉を取り寄せるやら、日に四度色の変わる牡丹を庭に植えさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦を縫わせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子をあつらえるやら、そのぜいたくをいちいち書いては、いつになってもこの話がおしまいにないくらいです。

するとこういうつわさを聞いて、今までは道で行き合っても、挨拶さえしなかった友達などが、朝夕遊びにやってきました。それも一日ごとに数が増して、半年ばかりたつうちには、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もないくらいになってしまったのです。杜子春はこのお客たちを相手に、毎日酒盛りをひらきました。その酒盛りのまた盛んなことは、なかなか口には尽くされません。ごくかいつまんだだけをお話ししても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を酌んで、天竺生まれの魔法使いが刀をのんでみせる芸に見とれていると、その周りには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節おもしろく奏しているという景色なのです。

しかしいくら大金持ちでも、お金には際限がありますから、さすがにぜいたく家の杜子春も、一年二年とたつうちには、だんだん貧乏になりました。そうすると人間は薄情なもので、

昨日までは毎日来た友達も、今日は門の前を通過してきえ、挨拶一つしていきません。ましてどうとう三年めの春、また杜子春が以前のとおおり、一文なしになってみると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなってしまいました。いや、宿を貸すどころか、今ではわんに一杯の水も、恵んでくれる者はないのです。

そこで彼はある日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ぼんやり空を眺めながら、途方にくれて立っていました。するとやはり昔のように老人が、どこからか姿を現して、

「おまえは何を考えているのだ。」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥ずかしそうに下を向いたまま、しばらくは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰り返しますから、こちらも前と同じように、「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それはかわいそうだな。では俺がいいことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、おまえの影が地に映ったら、その胸にあたるどころを、夜中に掘ってみるがいい。きっと車にいったばい黄金が埋まっているはずだから。」

老人はこう言ったと思うと、今度もまた人ごみの中へ、かき消すように隠れてしまいました。杜子春はその翌日から、たちまち天下第一の大金持ちに返りました。と同時にあいかわらず、しほうだいなぜいたくを始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中眠っている白孔雀、それから刀をのんでみせる、天竺から来た魔法使い——全てが昔のとおりののです。

ですから車にいったばいにあった、あのおびただしい黄金も、また三年ばかりたつうちには、すっかりなくなってしまうました。

5 【玄宗皇帝】唐の皇帝。

6 【蘭陵】中国東部にある地名。

6 【桂州】中国にあった州の名前。

6 【竜眼肉】竜眼という植物の果実。

15 【天竺】インドのこと。

16 【翡翠】緑色の宝石。

16 【瑪瑙】白や青、茶色などのしま模様をもつ宝石。

17 【節おもしろい】趣深い調子の。

「おまえは何を考えているのだ。」

老人は、三度杜子春前へ来て、同じことを問いかけてました。もちろん彼はそのときも、洛陽の西の門の下に、細々と霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやりたたずんでいたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っっているのです。」

「そうか。それはかわいそうだな。では俺がいいことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、おまえの影が地に映ったら、その腹にあたるところを、夜中に掘ってみるがいい。きっと車にいつぱいの——」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を上げて、その言葉を遮りました。

「いや、お金はもういらぬのです。」

「金はもういらぬ？ ははあ、ではぜいたくをするにはどうとう飽きてしまったとみえるな。」

老人はいぶかしそうな目つきをしながら、じっと杜子春の顔を見つめました。

「なに、ぜいたくに飽きたのじゃありません。人間というものに愛想が尽きたのです。」

杜子春は不平そうな顔をしながら、つつけんどんにこう言いました。

「それはおもしろいな。どうしてまた人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持ちになったときには、世辞もついでしようもしますけれど、いつたん貧乏になってごらんさい。優しい顔さえもしてみせはしません。そんなことを考えると、

たといもう一度大金持ちになったところが、何にもならないような気がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑いだしました。

「そうか。いや、おまえは若い者に似合わず、感心にもものわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮らしていくつもりか。」

杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思いきった目をあげると、訴えるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私にはできません。ですから私はあなたの弟子になって、仙術の修業をしたいと思っております。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜のうちに私を天下第一の大金持ちにすることはできないはずですよ。どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えてください。」

老人は眉をひそめたまま、しばらくは黙って、なにごとか考えているようでしたが、やがてまたにっこり笑いながら、

「いかにも俺は峨眉山に住んでいる、鉄冠子という仙人だ。はじめおまえの顔を見たとき、どこかものわかりがよさそうだったから、二度まで大金持ちにしてやったのだが、それほど仙人になりたければ、俺の弟子に取り立ててやろう。」と、快く願いをいれてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らないうちに、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子におじぎをしました。

「いや、そうお礼などは言ってもらうまい。いくら俺の弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、おまえ次第で決まることだからな。——が、ともかくもまず俺と一緒に、峨眉山の奥へ来てみるがいい。おお、幸い、ここに竹づえが一本落ちていて。ではさっそくこれへ

乗って、一飛びに空を渡るとしよう。」

鉄冠子はそこにあった青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文を唱えながら、杜子春と一緒
にその竹へ、馬にでも乗るようにまたがりました。すると不思議ではありませんか。竹づえはた
ちまち竜のように、勢いよく大空へ舞い上がって、晴れわたった春の夕空を峨眉山の方角へ飛
んでいきました。

杜子春は肝をつぶしながら、恐る恐る下を見下ろしました。が、下にはただ青い山々が夕明
かりの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、(とうに霞にまぎれたのでしよう)どこ
を探しても見あたりません。そのうちに鉄冠子は、白いびんの毛を風に吹かせて、高らかに歌を
歌いだしました。

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。

袖裏の青蛇、胆気粗なり。

三たび岳陽に入れども、人識らず。

朗吟して、飛過す洞庭湖。

四

二人を乗せた青竹は、まもなく峨眉山へ舞い下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だとみえて、中空に垂
れた北斗の星が、茶わんほどの大きさに光っていました。元より人跡の絶えた山ですから、辺り
はしんと静まり返って、やっと耳に入るものは、後ろの絶壁に生えている、曲がりくねった一株

の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に座らせて、

「俺はこれから天上へ行って、西王母にお目にかかってくるから、おまえはその間ここに座って、
俺の帰るのを待っているがいい。たぶん俺がいなくなると、いろいろな魔性が現れて、おまえ
をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。
もしひと言でも口をきいたら、おまえはどうてい仙人にはなれないものだど覚悟をしろ。いいか。
天地が裂けても、黙っているのだぞ。」と言いました。

「だいじょうぶです。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています。」

「そうか。それを聞いて、俺も安心した。では俺は行ってくるから。」

老人は杜子春に別れを告げると、またあの竹づえにまたがって、夜目にも削ったような山々
の空へ、一文字に消えてしまいました。

杜子春はたった一人、岩の上に座ったまま、静かに星を眺めていました。するとかれこれ半
時ばかりたって、深山の夜気が肌寒く薄衣着物にとおりだした頃、突然空中に声があって、

「そこにいるのは何者だ。」と、叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の教えどおり、なんとも返事をしませんでした。

ところがまたしばらくすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないとたちどころに、命はないものと覚悟しろ。」と、いかめしく脅しつけるのです。

杜子春はもろもろ黙っていました。

と、どこから登ってきたか、らんらんと目を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上がって、
杜子春の姿をにらみながら、一声高くたけりました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の

6 【肝をつぶす】非常に驚く。

8 【びん】頭の左右側面の髪。

10 【朝に北海に遊び……】呂洞賓という仙人が作ったとされる詩。

17 【北斗の星】北斗七星のこと。

3 【西王母】中国の神話に登場する女神。

枝が、激しくざわざわ揺れたと思うと、後ろの絶壁の頂からは、四斗樽ほどの白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、みるみる近くへ下りてくるのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに座っていました。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互いに隙でもうかがうのか、しばらくはにらみ合いのていでしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙にかまれるか、蛇の舌にのまれるか、杜子春の命はまたたくうちに、なくなってしまうと思ったとき、虎と蛇とは霧のごとく、夜風とともに消えうせて、あとにはただ、絶壁の松が、さっきのとおりこうとう枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起こるか、心待ちに待っていました。

すると一陣の風が吹き起こって、墨のような黒雲が一面に辺りをとぎすやいなや、薄紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、すさまじく雷が鳴りだしました。いや、雷ばかりではありません。それと一緒に滝のような雨も、いきなりどうどうと降りだしたのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく座っていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光——しばらくはさすがの峨眉山も、覆るかと思うくらいでしたが、そのうちに耳をもつんざくほど、大きな雷鳴がとどろいたと思うと、空にうずまいた黒雲の中から、真っ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を押さえて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに目を開いて見ると、空は以前のとおり晴れわたって、向こうにそびえた山々の上にも、茶わんほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。してみれば今の嵐も、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性のいたずらにちがいません。杜子春はようやく安心して、額の冷や

汗を拭いながら、また岩の上に座り直しました。

が、そのため息がまだ消えないうちに、今度は彼の座っている前へ、金のよろいを着下した、身の丈三丈もあろうという、敵かな神将が現れました。神将は手に三つ又の矛を持っています。だが、いきなりその矛の切っ先を杜子春の胸もとへ向けながら、目を怒らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、そのほうはいったい何者だ。この峨眉山という山は、天地開闢の昔から、俺が住まいをしている所だぞ。それもはばかりすたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもやただの間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ。」と言うのです。

しかし杜子春は老人の言葉どおり、黙然と口をつぐんでいました。

「返事をしないか。——しないな。よし。しなければ、しないでかかってにしろ。そのかわり俺の眷属たちが、そのほうをすたすたに斬ってしまうぞ。」

神将は矛を高く上げて、向こうの山の空を招きました。そのとたんに闇がさっと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲のごとく空に満ち満ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。

この景色を見た杜子春は、思わずあっと叫びそうにしましたが、すぐにまた鉄冠子の言葉を考えて、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒ったの怒らないのではありません。

「この強情者め。どうしても返事をしなければ、約束どおり命はとってやるぞ。」

神将はこうわめくが早いのか、三つ又の矛をひらめかせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむほど、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。

1 【四斗樽】酒などが四斗ほど入る樽。一斗は約一ハリツトル。

3 【丈】長さの単位。一丈は約三・〇メートル。

6 【天地開闢】世界のでき始め。

11 【眷属】血のつながりて結ばれている人々。

もちろんこのときはもう無数の神兵も、吹きわたる夜風の音と一緒に、夢のように消えうせたあ
どだったのです。

北斗の星はまた寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変わらず、こうこ
うと枝を鳴らせています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れていました。

五

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、杜子春の魂は、静かに体から抜け出
して、地獄の底へ下りていきました。

この世と地獄との間には、閻六道という道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい
風がびゅうびゅう吹きすさんでいるのです。杜子春はその風に吹かれながら、しばらくはただ
木の葉のように、空を漂っていきましたが、やがて森羅殿という額の掛かった立派な御殿の前
へ出ました。

御殿の前にいたおおぜいの鬼は、杜子春の姿を見るやいなや、すぐにその周りを取り巻いて、
階の前へ引き据えました。階の上には一人の王様が、真っ黒な着物に金の冠をかぶつて、
いかめしく辺りをにらんでいます。これはかねてうわさに聞いた、閻魔王にちがいありません。
杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへひざまずいていました。

「こら、そのほうはなんのために、峨眉山の上へ座っていた？」
閻魔王の声は雷のように、階の上から響きました。杜子春はさっそくその問いに答え
ようとしましたが、ふとまた思い出したのは、「決して口をきくな。」という鉄冠子の戒めの言

葉です。そこでただ頭を垂れたまま黙っていました。すると閻魔王は、持っていた鉄の笏を
上げて、顔中のひげを逆立てながら、

「そのほうはここをどこだと思つ？
速やかに返答をすればよし、さもなければ時を移さず、地
獄の呵責に遭わせてくれるぞ。」と、居丈高に罵りました。

が、杜子春はあいかわらず唇一つ動かしません。それを見た閻魔王は、すぐに鬼どもの
方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度にかしこまって、たちまち杜子春を引
き立てながら、森羅殿の空へ舞い上がりました。

地獄には誰でも知っているとおり、剣の山や血の池のほかにも、焦熱地獄という炎の谷や
極寒地獄という氷の海が、真っ暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、かわ
るがわる杜子春を放り込みました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、
炎に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵につかれるやら、油の
鍋に煮られるやら、毒蛇に脳みそを吸われるやら、熊鷹に目を食われるやら、――その苦しみを
数え立てていては、とうてい際限がないくらい、あらゆる責め苦に遭わされたのです。それでも
杜子春は我慢強く、じっと歯を食いしばったまま、ひと言も口をききませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、あきれ返ってしまったのでしよう。もう一度夜のような空を飛ん
で、森羅殿の前へ帰ってくると、さっきのとおり杜子春を階の下に引き据えながら、御殿の
上の閻魔王に、

「この罪人はどうしても、ものを言う気色がございません。」と、口をそろえて言上しました。
閻魔王は眉をひそめて、しばらく思案にくれていました。やがて何か思いついたとみえて、
「この男の父母は、畜生道に落ちているはずだから、さっそくここへ引き立ててこい。」と、一

10 【森羅】宇宙にあるあらゆるもの。

13 【階】階段。

14 【閻魔王】地獄で罪人を裁くという大王。

1 【笏】正装した際に右手で持つ薄く長い板。

12 【熊鷹】タカ科の鳥。大形で、小動物を捕食する。

18 【言上する】身分の高い人に申しあげる。

20 【畜生道】仏教で、悪いことをしたために、死後人間以外の生き物に生まれ変わって苦しむ世界。

匹の鬼に言いつけました。

鬼はたちまち風に乗って、地獄の空へ舞い上がりました。と思うと、また星が流れるように、二匹の獣を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りてきました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえどそれは二匹とも、形はみすぼらしい痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母のとおりでしたから。

「こら、そのほうはなんのために、峨眉山の上に座っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はそのほうの父母に痛い思いをさせてやるぞ。」

杜子春は、こう脅されても、やはり返答をせずにいました。

「この不孝者めが。そのほうは父母が苦しんでも、そのほうさえ都合がよければ、いいと思ってるのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れるほど、すさまじい声でわめきました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ。」

鬼どもは一斉に「はっ。」と答えながら、鉄の鞭をとって立ちあがると、四方八方から二匹の馬を、未練未酌なく打ち破りました。鞭はりゅうりゅうと風を切って、ところ嫌わず雨のようになり、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になった父母は、苦しそうに身をもだえて、目には血の涙を浮かべたまま、見てもいられないほどいなきたてました。

「どうだ。まだそのほうは白状しないか。」

閻魔大王は鬼どもに、しばらく鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答えを促しました。

もうそのときには二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階の前へ、倒れ伏していたのです。

杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、固く目をつぶっていました。するとそのとき彼の耳には、ほとんど声とはいえないくらい、かすかな声が伝わってきました。「心配をおしてない。私たちはどうなっても、おまえさえ幸せになれるのなら、それよりけっこうなことはないのだからね。大王が何とおっしゃっても、言いたくないことは黙っておいで。」

それは確かに懐かしい、母親の声にちがいありません。杜子春は思わず、目を開きました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じっと目をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、恨む気色さえも見せないのです。大金持ちになればお世辞を言い、貧乏人になれば口もきかない世間の人たちに比べると、なんというありがたい志でしょう。なんというけなげな決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、まるぶようにそのそばへ走り寄ると、両手に半死の馬の首を抱いて、はらはらと涙を落としてながら、「お母さん。」と一声を叫びました。……

六

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやりたたずんでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——全てがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。俺の弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい。」

の老人は微笑を含みながら言いました。

「なれませんが。なれませんが、しかし私はなれなかったことも、かえってうれしい気がするので

14 【未練未酌なく】同情したり、心情をくみ取ったりすることなく。

す。」

杜子春はまだ目に涙を浮かべたまま、思わず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っているわけにはいきません。」

「もしおまえが黙っていたら——」と鉄冠子は急に厳かな顔になって、じっと杜子春を見つめました。

「もしおまえが黙っていたら、俺は即座におまえの命を絶ってしまおうと思っていたのだ。」

——おまえはもう仙人になりたいという望みももってしまい。大金持ちになることは、元より愛想が尽きたはずだ。ではおまえはこれからのち、何になっただらいいと思うな。」

「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです。」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子がこもっていました。

「その言葉を忘れるなよ。では俺は今日限り、二度とおまえには会わないから。」

鉄冠子はこう言ううちに、もう歩きだしていましたが、急にまた足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

おお、幸い、今思い出したが、俺は泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとおまえにやるから、さっそく行って住まうがいい。今頃はちょうど家の周りに、桃の花が一面に咲いているだろう。」と、さも愉快そうにつけ加えました。

〈出典 『芥川龍之介全集4』（筑摩書房、一九八七）〉

15

15 【泰山】中国東部にある山の名前。

【著者】芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）

一八九二（明治二五）年—一九二七（昭和二）年

作家。東京都の生まれ。

【著書】『羅生門』『蜘蛛の糸』『蜜柑』など

10

5